様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ４ 月 １５ 日現在

機関番号：１３９０２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２５３０９６２

研究課題名（和文）『国語教育誌』を対象とした昭和戦前期国語教育の動向についての研究

研究課題名（英文）Research on the trend of the Showa prewar-days term Japanese language education for a "Kokugokyuikushi"

研究代表者
有働　裕（UDOU, YUTAKA）

愛知教育大学・教育学部・教授

研究者番号：２０２１３４６５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,500,000円、（間接経費）　450,000円

研究成果の概要（和文）：　この研究は、『国語教育誌』という学術雑誌を調査したものである。『国語教育誌』は、１９３８年1月から１９４１年9月まで刊行された、国語教育学会の機関誌である。当時の日本文学や日本語研究、あるいは教育学に携わる多くの研究者や教師が執筆している。だが、この時期はファシズムが進行しているだけに、時流に迎合する傾向が強く見られる。それゆえに、この学術雑誌はこれまで検討されたことがなく、忘れられた存在となっていた。国語教育に関係する研究者が、ファシズムが強まる中でどのように苦悩し、過ちを犯したかを知る手がかりとして、この研究は現代的な意義を有する。

研究成果の概要（英文）：This research investigates the scientific journal "Kokugokyouikushi"."Kokugokyouikushi " is bulletin of the Japanese-language-education society published from January, 1938 to September, 1941. Many researchers and teachers who are engaged in Japanese literature, Japanese language research, or pedagogy are writing. But, they had strongly a tendency passed by fascism.Because, this scientific journal is not examined until now and had become a forgotten existence. How were many researchers suffering from this time? Moreover What kind of mistake did they make? This research is significant in order to know that.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教科教育学

キーワード：国語教育誌　藤村作　西尾実　国語教育　国文学　国語学

１．研究開始当初の背景

本研究は、国語教育学会編『国語教育誌』前号の目次と書誌を示し、加えて掲載論文・記事の概要を紹介し、さらに解説と総索引を整備することを目的とするものである。

『国語教育誌』は昭和 13（1938）年から昭和 16 年まで毎月刊行された、Ａ５判の各号 30 頁弱の機関誌である。会長である藤村作をはじめとして、同会理事の島津久基、西尾実など、当時の国語学・国文学・国語科教育学の代表的な研究者が積極的に執筆している。太平洋戦争へと突入していく直前の社会・政治状況と、国語・国文学研究との関連を考察するうえでは必見の文献であるということができる。しかしながら、その時局性の強さゆえに、今日まで保存されることがまれであり、研究対象とされることも少なかった。

この雑誌は戦時下における国語国文学界・国語教育学界の動向を知るための好資料であり、詳細に検討することで各研究者の時局に対する姿勢を把握することができる。ゆえに、戦時下の国語国文学・国語教育研究者の戦争責任の問題を検討する際の基礎資料となる。

２．研究の目的

本研究、「『国語教育誌』（国語教育学会機関誌）を対象とした昭和戦前期の国語教育の動向に関する研究」は、昭和 13（1938）年から昭和 16（1941）年の間毎月刊行された、当時の国語教育学会機関誌の総目次と記事の解題を作成し、あわせて、解説と総索引を付して、今後の国語教育誌研究のための基礎的情報を公にしようとするものである。『国語教育誌』は当時の一流の執筆陣による、同分野の最重要研究誌であったにもかかわらず、全巻を完備している図書館は全国にわずかしかなく、従来の国語教育史研究においてほとんど活用されていない。それゆえに、同誌の全貌を明らかにすることは、極めて意義深いと思われる。

３．研究の方法

『国語教育誌』創刊号から終刊号までのすべての記事について調査し、以下のような資料をまとめあげる。

⑴総目次と執筆者一覧
⑵各論文・記事の内容要約
⑶学会に関する時評・情報の整理
⑷関連書籍や講演会等についての情報の整理
⑸上記に関するすべての事項についての総索引

これらをまとめた報告書を作成する。

４．研究成果

本研究は、国語教育学会編『国語教育誌』の書誌および掲載論文・記事の検討を通して、昭和戦前期の国語教育界の状況を分析するものである。また、そのような分析を通して、国語教育と国策とのかかわりという今日的な課題を考える上での一助たらんとするものである。

『国語教育誌』は昭和 13（1938）年から昭和 16 年まで毎月刊行された、Ａ５判の各号 30 頁弱の機関誌である。藤村作をはじめとして、西尾実、能勢朝次、久松潜一、石黒修、石井庄司らが積極的に執筆している。刊行のいきさつについては、第一号の「お願ひ」（ｐ26）に次のように記されている。

> 本会は「国語教育学会会報」を本会編輯の岩波講座「国語教育」の付録として刊行し、既に第十二号を昭和十二年九月を以て発行したが講座終了と同時に、これを独立し月刊雑誌として刊行、本会設立の根本義に徴しその任務遂行の大目的に立脚して、会員相互の連絡、研究発表機関とすることとしました。この際全国津々浦々に散在する全会員諸氏の御賛同と御支持を特に願ひ申し上げる次第であります。

国語教育学会は、昭和 9 年 1 月に創設されている。この学会の創設には藤村作が中心的役割を果たしており、国策に合致した「思想善導」の手段として「古典文学」を役立てることが大きな目的の一つとなっている。それは、直接には演劇「源氏物語」上演の警視庁保安部による禁止（昭和 8 年 11 月）を契機とするものと思われる。すなわち、国文学やその研究が時局にあわぬ厭戦的なものと見なされかねないことに危機感を感じた藤村が、国策においていかに国文学が有益であるかを訴えようとしたと理解できる（参照　拙著『「源氏物語」と戦争―戦時下の教育と古典文学―』2002 年・インパクト出版会）。

この機関誌は戦時下における国語国文学界・国語教育学界の動向を知るための好資料であり、詳細に検討することで各研究者の時局に対する姿勢を把握することができる。

『国語教育誌』の特色は、総目次を瞥見しただけですぐに感得できる。

まずは、創刊号の藤村作の巻頭言が示すごとく、大正時代の自由主義的な教育観を否定して、国家主義に基づく国語科教育の確立を積極的に進めようとしていることである。この機関誌はサクラ読本の使用が 6 年生段階まで達する年に創刊され、国民学校令が施行された年に終刊となるわけだが、その間において、国策に迎合する国語教育論を牽引する役割を果たしたといえる。

次に、会長である藤村作の主導性の強さがあげられる。創刊号から終刊号に至る全 44 号のほとんどの巻頭言を執筆しており、公開講座の開催なども含めて、文字通り中心となって活躍していたことがわかる。

その一方、様々な分野の、しかもそれぞれの第一人者ともいうべき研究者が執筆しており、掲載論文の内容は多岐にわたっている。その例として、塩田良平「若松賤子と教化文学」(昭和 13 年 8 月号、9 月号)、波多野完治「文章心理学的研究」(昭和 13 年 11 月号)、今泉忠義「文法の時間、読み方の時間」(昭和 14 年 8 月号)、城戸幡太郎「国語教育における形象の問題について」(昭和 15 年 1 月号)、金田一春彦「東京アクセントの再検討」(昭和 16 年 8 月号、9 月号) などをあげることができる。これらからは、国文学や国語学、心理学や教育学からの国策教育協力の姿勢とともに、各人の時局との距離のとり方をも見出すことができる。

そのような各分野の専門家が、特定のテーマの下に誌上で論議し合うこともあった。その典型が第 3 巻第 3 号（昭和 15 年 3 月号）である。

この号は、梅根悟による「提案　初等国語への註文―国民学校国語科の組織について―」に各氏が応えるという特集になっている。梅根氏の主張は、国語教育が文芸主義に偏していることを批判し、「言語技術の組織的学習」を重視するものであった。それに対する「検討と希望」として、石井庄司、石黒修、岡本千万太郎、木枝増一、佐久間鼎、滑川道夫、西尾実、能勢朝次、波多野完治の各氏が意見を述べている。

このように、『国体の本義』などによって提示された教育政策への迎合姿勢が濃厚な機関誌といってよい。しかしながら、表現にかなり神経を使いながらも、国家主義的な国語教育を批判している文章が、わずかながら見出せることには注目しなくてはならない。近藤忠義の「一つの感想」(昭和 13 年 3 月号)、岩永胖の随想「十年」(昭和 14 年 1 月号)、輿水実の「昭和十五年国語教育界の展望と批判」(昭和 15 年 12 月号) などがそれである。

以上のような活動を続けた『国語教育誌』ではあるが、刊行 4 年目にして終焉を迎えることとなる。

第四巻第四号（昭和 16 年 4 月号）の「学会消息」には以下のような記述がある。

> 昭和十六年度の会費は、すでにかなり拂ひこみいただゞいている。雑誌発行に要する費用なども、本文十六頁といふ制限を厳重に守りながらも、以前にくらべると二倍以上にのぼつてをり、経営の困難を感じてゐる。会員各位の尚一層の御協力を期待してゐる。

この時期にはすでに刊行の継続が難しくなっていたのであろう。

そして、創刊号以来毎月発行されたこの機関誌が、この年の 7 月に初めて休刊する。第 4 巻第 7 号（昭和 16 年 8 月号）の 17 ページには、「本誌七月号は、都合により臨時休刊致しました」という報告がある。「国語教育会消息」の欄には、毎年大規模に行われてきた夏期講座の中止が告知されている。理由は「時局の重大にかんがみ」とされている。

そして、事実上の終刊号となったのが第四巻第八号（昭和 16 年 9 月号）であった。その巻頭言「国民教育は個人生活の低級に反省せよ」における藤村作の筆致には、それまでにない内省的なものが感じられる。明治以来、「白人種」が日本にやって来て、学資の支給や救貧のための協会設立など、「その自ら感じてゐた優越性を常によき意味に発露していた」のに比べ、「然るに大陸等に於ける日本人の個人生活を見よ、こゝには悲しむべき外人侮辱、搾取的行為がないといへるであらうか」と、日本人個々人の態度について反省を促している。もちろん「日本国は断じて侵略国でない」という文脈においての主張ではあるが、大陸の現状を視察した後の藤村の心境が反映されているように思える。

わずか 4 年間足らずの発行期間ではあるが、日本が日中戦争から太平洋戦争へと進んでいく時期の、国語科教育の在り方を如実に示す資料ということができる。国家と教育との関わりにおいて極めて危険な兆候が見られる今日、このような国語教育史の負の側面を改めて直視することが必要ではないだろうか。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　4　件）

①<u>有働裕</u>、『国語教育誌』の書誌と記載内容概要（六）、国語国文学報、査読無、71 号、2013、pp.33-48

②<u>有働裕</u>、『国語教育誌』の書誌と記載内容概要（五）、愛知教育大学大学院国語研究、査読無、21 号、2013、pp.23-40

③<u>有働裕</u>、『国語教育誌』の書誌と記載内容概要（四）、愛知教育大学大学院国語研究、査読無、20 号、2012、pp.1-22

④<u>有働裕</u>、『国語教育誌』の書誌と記載内容概要（三）、愛知教育大学大学院国語研究、査読無、19 号、2011、pp.1-18

〔学会発表〕（計　1　件）

2013 年 5 月 18 日
第 124 回全国大学国語教育学会（於弘前大学）
有働裕
「『国語教育誌』にみる昭和戦前期の国語教育の動向」

〔図書〕（計　1　件）

有働裕
『国語教育誌』を対象とした昭和戦前期国語教育の動向についての研究
2014 年 3 月 15 日発行、総ページ数 118
印刷所　　株式会社コームラ

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
有働　裕（UDOU, YUTAKA）
愛知教育大学・教育学部・教授
研究者番号：20213465

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし